

第6章

直す、立ち上がる 復旧期の町

水道、電気などのライフラインの復旧をはじめ、仮設商店街の立ち上げや震災後に来町した応援職員の活動など、大槌町の復旧の経過を多面的に追う。また、古里の復旧に向けて立ち上がった町民たちにインタビューを行い、当時の出来事について語ってもらった。



仮設の復幸きらり商店街に掲げられた「ひょっこりひょうたん島」の歌詞の一節（2011年12月17日撮影）。誰もがこの歌を口ずさんで自らを奮い立たせた



がれき撤去のために重機が大量に必要となった(2011年4月27日撮影)

町内で66万トンを撤去

東日本大震災では災害廃棄物、いわゆる「がれき」が大量に発生した。一瞬にして町中ががれきの山と化し、かつての町の面影は消えうせた。そのような状況の中、支援物資の受け入れなど、外からの支援を受けるためにも、一刻も早くがれきを撤去して道を切り開くことが求められた。

発災から1週間後、がれきの撤去作業が始まった。大槌町は他の市町村よりも初動が遅かったといわれている。作業に必要な重機を持つ民間事業者が被災し、さらに被災を免れて残った数少ない重機を稼働させたくても燃料が不足していた。

本来は役場の地域整備課(当時)の技術系職員が作業の指揮を執るはずだったが、職員の多くが津波の犠牲となったため、臨時で他の課の技術職経験者を起用した。国や県のほか、自衛隊、地元の建設会社、

重機を取り扱う企業などの協力を得て、作業エリアを分担してがれきの撤去を進めた。

作業の中で配慮すべき点が幾つかあった。他の市町村で積み上げたがれきの内部での発酵で熱がこもり、火災が発生した事例があったことから、がれきをかき混ぜて熱を逃がすなどの処置により火災予防に努めた。また、町有地には限りがあり、がれき置き場となる土地を早期に確保する必要があった。必要な土地面積を割り出して早めに出地交渉を行い、沢山地区の葉王堂付近、吉里吉里フィッシュリーナ付近などを置き場とした。

置き場に集めたがれきは2段階で分別を行った。1次分別では木くずや土砂、鉄くず、コンクリートがらなどの7〜8種目に分けた。2次分別は大槌町が土地を用意し、岩手県の協力を得てさらに細かく分別。その後、県内の焼却施設に協力を要請、盛岡市や奥州市などの複数の施設に受け入れてもらい焼

却処分した(表6-1)。

他の市町村から重機の支援が進み、それまでがれき撤去の主力となっていた自衛隊の撤退時期に合わせて、重機を大量投入した。人手や重機を計画的に用いて作業を進めた結果、初動の遅れを挽回し、10月末に建物以外のがれき撤去が完了した。撤去されたがれきの総量は約66万トンに上る(表6-2)。

許諾得て取り壊し

一言で「がれき」と言っても、その一つ一つはもともと、ここで長く暮らしてきた町民の大切な思い出の品である。国の方針では、津波で大きく損壊した建物に関しては、持ち主の承諾を得なくても取り壊しを許可していたが、他の市町村では「勝手に壊された」などの声が上がった例もあった。大槌町では、被災した建物や船、車などの取り壊しに関して、避難所巡回や町発行の広報で知らせるなどの方法で、所有者や

その家族、親戚などに直接確認し、極力個人の意向を尊重して作業を進めた。



解体前の建物の周辺や屋内のがれきを処理する自衛隊

表6-1 災害廃棄物焼却受け入れを行った県内陸・沿岸部の焼却施設

施設名	処理能力(トン/日)	余剰能力(トン/日)	処理実績(トン)
盛岡・紫波地区環境施設組合ごみ焼却施設	160	11	3,733
胆江地区衛生センター	240	10	3,226
大東清掃センターごみ焼却施設	147	50	1,776
いわて第2クリーンセンター(民間)	80	10	15,496
岩手沿岸南部クリーンセンター	147	50	30,515

「東日本大震災津波により発生した災害廃棄物の岩手県における処理の記録」岩手県2015年から ※大槌町以外の被災市町村の災害廃棄物処理量も含む

表6-2 大槌町の災害廃棄物の品目別市町村処理実績等(単位:トン)

津波堆積土	コンクリートがら	不燃系廃棄物	柱材・角材	可燃物	金属くず	漁具・漁網	その他	合計
206,469	256,301	111,271	1,604	53,562	28,437	1,824	596	660,064

「東日本大震災津波により発生した災害廃棄物の岩手県における処理の記録」岩手県2015年から ※端数処理のため合わない場合がある

Interview

安全な砂浜目指し 丁寧ながれき撤去

大槌町復興推進課 課長

中野 智洋

震災当初は企画財政課に所属しており、避難所の運営などをしていました。しかし、町の技術系職員が多く亡くなると町の復旧事業を行う人手が足りず、ハード整備事業の経験者である私が、がれき撤去や道路啓開(切り開く)ことなどを行う担当者となりました。

初期は携帯電話が繋がらなかつたため、建設作業員が毎朝8時に同じ場所に集合することに決めて、がれき撤去の状況や作業内容の確認指示をしました。食料もない中で体力を使う仕事のため、せめても食料をと、少量のおにぎりやパンを支給して動いてもらう状況でした。

「大槌町のがれき処理は遅れている」と言われていましたが、多くの人の協力があつて計画的に作業を進めることができました。中でも気に掛けたのは、吉里吉里海岸のがれき撤去。海開きを意識して、特に丁寧に行いました。以前のよう、子どもたちがはだして歩いてあげがれないような浜にしよう。明るい話題も提供したかったですから。



がれきを取り除いて通行可能になった、安渡一丁目付近の県道大槌小槌線

主要道路の作業優先

海沿いに位置する地域全ての幹線道路は、津波による浸水とがれきで外部との交通を絶たれ、地域ごと

国道45号をふさいでいたが、啓開作業により3月15日に2車線の交通路が確保された。また、浪板地区に

国道45号は全て通行可能だったが、県道は20%、町道は10%という状況だった。

町内では各地域で、町民が自主的にがれきを取り除く作業を行い、支援への道を切り開いた。例えば、吉里吉里地区の場合、地元の建設業者や造園業者が重機4台を持ち

危険な箇所から優先順位を決めて修繕しつつ災害復旧の仮道路を造り、通行路を確保した。復興基

本計画の策定後、仮道路を撤去して、区画整理に沿った本道路工事を進めた。



自衛隊による道路啓開作業

災害に強い道路網を

東日本大震災を教訓に住民の要望が高まっていた津波からの避難路が桜木町に整備され、2017(平成29)年4月に竣工した。同避難路は、城山林道1号線に接続すること

策本部が設置される中央公民館や、町指定避難所である城山公園体育館への避難が容易になった。

さらに、小槌地区の三枚堂側と大ケ口地区を結ぶトンネル工事が完了すれば、津波の浸水区域を避けて、通行できるようになるなど、災害に強い道路網の整備が進む。

また、青森県八戸市から仙台市までをつなぐ三陸沿岸道路の一部となる釜石山田道路の工事が進められている。17年には同道路の町内



沢山地区に整備された大槌インターチェンジ

Interview

誰もが未経験 自分を信じて判断

大槌町復興推進課 課長 中野 智洋

本来であればそれぞれに別の担当者が付くのですが、圧倒的に人手が足りなかつたので、がれきの撤去や道路の啓開、下水道など、さまざまな分野の担当を各員でしなければならぬ状況でした。こんな経験は誰もしたことがなく、判断が難しいことばかりでした。

特に意識したのは、津波で浸水していない地域への配慮です。海側の地区の被害がひどかったため、内陸の金沢、小槌の皆さんが支援してくれていましたが、同じ被災者ですよね。浸水区域外でも道路が傷をいたし、住民にも配慮したかったので、ある程度優先して作業しました。



避難所の城山公園体育館で展開された神戸市水道局の給水活動

表6-3 給水活動の概要

区分	受け入れ数等	備考
活動事業体	48事業体	・日本水道協会関西支部加盟43事業体 ・同東北支部加盟5事業体
給水タンク車	425台	90日間の延べ台数
給水量	2,305㎡	90日間の合計水量
対象地区	町内全域	3月停電時は全地区、その後避難所および在宅避難

ンプで水をくみ上げることができなかったが、町にはもともと給水車がなく、水を届けることができなかったため、水道事業所に来れば水があることを各避難所や世帯に伝え、応急給水を行った。

3月17日から、公益社団法人日本水道協会加盟の48事業体が支援に入り、避難所や在宅避難者への応急給水活動を展開した(表6-3)。特に、独自に大槌町を支援先に定めた神戸市水道局は、応急給水活

動の開始当初から最終の2カ月半後まで職員の派遣を継続。6月25日には給水タンク車を町に無償譲渡し、避難所が閉鎖されるまでの間、給水活動を行うことができた。

持続可能な水道を

2012(平成24)年9月に水道事業の復興計画が策定された。スローガンは「災害に備え、持続可能な水道づくり」とした。同計画では、中継ポンプ施設や主要管路を浸水区域外に設置。復旧に主眼を置いた計画とすることもできたが、国や県に要望し、再度津波が来襲しても水道を供給できるような内容とした。復興計画作成の際にも神戸市水道局の多大な協力を得た。

下水道の被害と復旧

下水処理場施設である大槌浄化センターは、津波によって電気設備が全壊したが、13(同25)年1月31

上水道の被害と復旧

大ケ口地区の大槌町水道事業所にも、高さ約50センチメートルの津波が押し寄せた。津波そのものによる直接的な被害はなかったが、停電となった。すぐに発電機で電気を復旧し、災害対応に当たった。3月13日から町内の水道施設の被害状況を調査すると、浪板ポンプ場と赤浜ポンプ場、筋山ポンプ場に津波の冠水被害が確認された。また、送水管が架けられた安渡橋は落橋



津波で破壊された安渡橋。同時に水道管も破損した

日に復旧が完了した。ポンプ施設については、桜木町雨水ポンプ場、栄町雨水ポンプ場、大町雨水ポンプ場が稼働停止となったが、14(同26)年3月の大町雨水ポンプ場の復旧で、全て再稼働した。

峠越え仕入れたガス

大槌町のガスは、プロパンガスであり、電力と比べて復旧が早かった。がれきを取り除かれ、車両の通行が可能になったことにより、ガスの復旧に向けた動きが活発化。土坂峠を越えて盛岡市にある業者へ出向いて交換用ガスボンベを仕入れ、避難所、公民館など、災害弱者が多く、優先順位の高い箇所から随時補充していった。地下のガス導管を通じて供給される都市ガスと異なり、ガスボンベを交換すればすぐに使用できるプロパンガスだったことが早期復旧につながった。

Interview

経験に基づいた

「寄り添う支援」に感謝

大槌町水道事業所 所長

田中 寛之

大槌町の上水道がここまで復旧できたのは、全国からの応援があったからだと思います。震災直後の3月16日には神戸市水道局の先遣隊が効果的な支援を求め、自主的な判断で大槌に来てくださいました。また、地元水道業者や水道事業の経験が豊富な役場OBも応援に駆け付けました。復旧作業や漏水の止水作業をしていると、町民からねぎらいの声を掛けていただくこともありました。

神戸市水道局の方々からは、阪神淡路大震災の経験に基づいた、非常に力強い支援を頂きました。被災している現場職員の心情や大変さを身をもって理解し、寄り添って一緒に作業してくれました。「こういう支援もできますが、いかがですか」というように、決して押し付けるような支援の姿勢ではなかったこともありがたかったです。その後は堺市上下水道局から職員を派遣していただいています。堺市で大槌への派遣を募集すると、すぐに手が上がるということも聞いています。本当に感謝しています。

しており、同じく吉里吉里海岸付近の道路に埋設された水道管も流失していた。町内で浸水被害を免れた地域では、電力会社から復旧時期を随時聞き取りながら、作業していった。送配水施設の復旧が終わった地域でも、通電が開始されていない場合もあり、通水には電力の復旧を待たなければならなかった。居住者がいる町内の全地域に通水したのは、震災から2カ月後の5月16日だった。各家屋の漏水を止める作業にも苦労が伴った。道路上のがれきは撤去されていても、給水管は各家屋の敷地内にあるため、がれきが堆積し、どこに止水栓があるか分からなかった。被害を心配して集まった地元水道事業者も加わり、土地勘を頼りに止水栓の位置を推定し、がれきを除けながら止水作業を進めた。

支援受け給水活動

水道事業所前にある井戸からボ



間仕切りされた吉里吉里小体育館で学ぶ大槌北小の児童たち

失われた学びの場

大槌町では町立小中学校の7校中5校、幼稚園保育園(所)の5カ所が被災したが、教職員らの的確な判断で、ほとんどの児童生徒はいち早く避難して助かった。津波被害に加え、上町の大槌小や源水地区の大槌中は津波火災の類焼で校舎が使えなくなった。被災を免れた吉里吉里地区の町立吉里吉里小・同吉里吉里中、沢山地区の県立大槌高校は避難する人であふれ、教育を行える環境ではなかった。

大槌町教育委員会の伊藤正治(いとうしょうじ)教育長(当時)は、中央公民館に設置された災害対策本部で責任者としての職務に忙殺されていた。子どもたちのために一刻も早く学びの場を整える必要があると考え、武藤美由紀(むとうみゆき)町教育委員会指導主事(同)に学校再開への取り組みを指示。同指導主事を中心に、早急な教育再開を目指して動き始めた。

学校再開に向け奔走

震災後初の町校長会議は3月20日に開かれ、同月29日までに町内の全小中学校の卒業式を行うことを決めた。避難所になった安渡小は校庭で、同じく吉里吉里小は視聴覚室で挙行了した。その後、町教委と各校長は会議を重ね、学校再開の時期や場所、登下校時の交通手段や教育課程の編成など具体的な事柄を検討し、準備を進めた。

中でも、被災5校(小学生450人、中学生290人)の受け入れ先の選定は困難を伴った。大槌中は被災していない大槌高校に来春受験を控えた3年生の教室を優先的に確保、1・2年生は吉里吉里中の空き教室を借用した。安渡小と赤浜小は吉里吉里小へ、沢山地区の大槌北小は避難所となっていた吉里吉里小体育館をパーティションで間仕切りして教室を作った。大槌小は山田町船越にある県立の研修施設「陸中海岸青少年の家」の研修

施設や体育館をパーティションで区切り、教室を確保した。こうして震災から約1カ月後の4月20日に小中学校が再開した。この日、大槌中を迎えた吉里吉里中は昇降口に歓迎の横断幕を掲げ、体育館で開かれた交流会で両校生徒がエールの交換などを行った。大槌高校では、震災直後から500人を超える避難者が集まっていたため、学校再開の遅れが懸念されていたが、避難者に他の避難所へ移動してもらったなどの調整を行い、4月25日に本格的に授業を開始した。

新しい教育への一歩

同年9月、被災した町立学校5校(大槌小・安渡小・赤浜小・大槌北小・大槌中)が入居する仮設校舎が小槌地区の大槌ふれあい運動公園に完成。これを受けて、子どもの数が年々減少傾向にあることや、被災した全ての校舎を復旧するためには膨大な時間と費用がかかること

などが検討された。その結果、大きな校舎を一つ建て、震災以前から構想のあった小中一貫教育を行う方針を決定した。

2013(平成25)年4月、被災した小学校4校を統合し、新しく「大槌小学校」として再編。さらに15(同27)年4月から大槌小と大槌中を「大槌学園」、吉里吉里小・吉里吉里中を「吉里吉里学園」として小中一貫教育の本実施がスタートした。16(同28)年に大槌学園が「義務教育学校」に移行。同年9月には大槌高校の隣に大槌学園の新校舎が完成し、小中一貫教育校として新たな一歩を踏み出した。

子どもの心に寄り添う

学校外からも多くの支援があった。スクールカウンセラーが各小中学校へ支援に入り、フラッシュバックによるストレスや家族を亡くした悲しみを抱える子どもたちに寄り添い、心身の負担を軽減するために

活動した。また、スクールソーシャルワーカーも早くから町に入り、学校・家庭と関係機関をつなぎながら環境などのサポートをした。さらに11(同23)年12月、NPO法人カタリバ(本部・東京)が「大槌臨学舎」を設立。これは、主に震災で自宅や塾を流されて十分な学習環境を得られない小中高生を対象にした、学習指導と心のケアを行う被災地の放課後学校(クラブスクール)である。翌年4月には、NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン(本部・東京)の支援により、子どもたちの安心・安全な居場所の確保を目的とした「大槌町こどもセンター」が開所。これと大槌臨学舎の二つの機能を統合し、放課後の教育施設として17(同29)年3月に「大槌町こども教育センター」が発足した。愛称である「OLAI」は大槌弁で「私の家」という意味を持つ。こうして、震災を経験した子どもたちが安心して教育を受けることができる環境が整えられた。

Interview

大槌の子どもたちのために学校再開へ奔走

当時大槌町教育委員会派遣 駐在指導主事 武藤 美由紀さん

当時、伊藤教育長に「学校再開については任せる」と託され、大槌の子どもたちのために自分がすべきことを全うすると決意しました。避難所には多くの方々が避難していましたが、避難所の中にも先生と子どもたちがいる空間は、形のない「教室」の雰囲気が醸し出されており、一刻も早い学校再開をしたいと考えました。

しかし、学校の再開を決めたものの、再開場所の調整が必要でした。多くの方のお力添えを頂きながら、町外の陸中海岸青少年の家が借用可能となり、町内全小中学校の再開を無事に迎えることができました。

再開の後は、これからの大槌町の教育システムを検討する段階に進みました。古里の良さを学び、これからの自分の生き方を見つめ、大槌の町の復興に貢献するような人材育成につながる「ふるさと科」を中核にした小中一貫教育です。これからの大槌町で学ぶ子どもたちの成長を心から願ってやみません。



県立大槌病院は2016年5月に新築落成式を行い、開院した

これを受けて県医師会は、紫波郡医師会と花巻市医師会に働き掛け、7月3日から土日曜、祝日を利用した診療支援が始まった。2012（平成24）年3月25日までの間で、支援医師は延べ61人に上った。

震災5年で再建

大槌病院の仮設診療所は、受付・診察室・処置室・放射線検査機器などを備え、1日90人近くの患者を診察した。状況の改善はあったが、医師不足は深刻で、町内の開業医をはじめ県内外の医師が交代で診療に当たった。

寄贈された仮設診療所（コンテナ式）に11（同23）年6月に移転し、12（同24）年6月には全身用コンピュータ断層撮影装置（CT）が設置され、稼働した。

本設の大槌病院は場所を小槌寺野地区「ふれあい運動公園内」とし、病床数は1病棟・一般病床で50床程度、診療科は内科・外科を基本に、



大槌病院の仮設診療所となった上町ふれあいセンター

これまでの外来機能を維持するとした整備の基本的な考え方が13（同25）年に示され、16（同28）年5月に開院した。これは、被災した三つの県立病院で初めての復旧となった。

被災した県立病院

大槌町には、県立病院1カ所、民間診療所7カ所、歯科診療所6カ所、調剤薬局6カ所の医療機関があったが、その全てが被災した。

新町にあった震災前の県立大槌病院は、大槌町の医療の中心としての役割を果たしていた。

しかし、津波の被害により町内の医療機能はまひ状態で救護所は薬を求める患者が詰め掛け、早期の診療所開設が求められた。

場所の確保は地元民の協力により、集会施設の上町ふれあいセンターを借りて、4月25日から診療を開始した。4月末にはコンテナ式診療所の寄贈が決定。建設工事を経て6月27日に仮設診療所を開設した。診察台や机などの備品も寄付され、医療機能の復旧に向けて前進した。

釜石病院と連携

大槌町の医療体制の立て直しは、大槌病院が中心となり、津波で被災しなかった県立釜石病院と連携することが大きな鍵となった。釜石病院は同じ釜石地域の保険医療圏の中核病院として位置づけられており、平時から協力関係にあった。

大槌病院で全ての患者の対応をするのではなく、急性期治療や専門的な治療が必要な場合は釜石病院を中心に受け入れ可能な病院に搬送し、より多くの患者に迅速な医療対応ができるようにした。

紫波と花巻による支援

大槌町を支援した日本医師会の災害医療チームJMATは、6月18日を最後に撤収。その翌日には、釜石医師会が町での活動を終えた。その後、医療体制の補完が求められたため、当時の釜石医師会会長が岩手県医師会に支援を要請した。



仮設診療所内では、町内外の医師らの活動により備品が整備されていった



新しい大槌病院は過去の津波が到達しなかった寺野地区に再建された

Interview

行かないと後悔する

「触る」を大事に診療を

元大槌病院心療内科医
日蓮宗僧侶

宮村 通典さん

あの日、私は故郷の長崎県にいました。長女の義母が大槌在住なので、大槌のことが気になっていました。9月になって大槌に行った時に、被害状況を目の当たりにした衝撃は忘れられません。何かしなければと思い、翌年の4月から大槌に移住し、医師として活動しました。行くことを決意した理由の一つに、「行かないと後悔する」という思いがありました。阪神・淡路大震災の時に博多にいたのですが、当時はすぐ動けなくて……。また、僧侶としての使命感もありました。いざ診察してみると、まだ自分の気持ちを言葉にできなかったり、31日が近くと胸の痛みを訴えたりする患者さんがいました。特に小さいお子さんを亡くした人は大変でした。診療のときに、私は必ず脈をとるようにしています。「触る」ということはすごく大事で、脈をとりながら、傾聴しました。

今後は、取り残された弱者、独居のお年寄りや酒浸りになったような人たちをどう支えていくかが課題ですね。



心のケアの支援者育成研修会の場面(「認定NPO法人心の架け橋いわて」提供)。被災地で自立的な支援ができるよう、人材育成が行われている

環境一変、心に負担

東日本大震災の被害による急激な環境の変化により、大槌町では多くの人が精神的な負担を抱えていた。震災後から応急対応に追われていた町職員らも、心身ともに疲弊していて、精神面のケアをする必要があった。

町は震災から1カ月半後の4月23日から5月8日、町民の健康状態を把握するため、保健師による全戸訪問調査を実施した。

元町役場勤務の保健師で岩手看護短期大学教授の鈴木^{すずき}るり^こ子^こさんが、保健師の全国組織などに呼び掛けて実現。ボランティアの137人が2人1組で各避難所や個人宅の約3700世帯・5082人と対面し、心身の健康に関する相談に応じるなどした。これによると、被災者や住民は年齢性別を問わずに血圧が高く、不眠やPTSD(心的外傷後ストレス障害)、サバイバーズギルト(生還者の罪悪感)に悩む人

が多かったという。

鈴木さんは「震災時に幼少で言葉が発せなかった子どもたちが学齢に達し、トラウマが現れるケースも。発達障害などと誤認されることもあり、注意が必要だ。震災の影響はこの先もずっと続く」と懸念する。

震災後、精神科医師を含む保健師、看護師、臨床心理士などで構成された「こころのケアチーム」が全国から派遣され、「震災ストレス相談室」も、大槌を含めて沿岸7カ所に開設された。大槌町にも同ケアチームが訪れ、避難所などを巡回し被災者の現状把握を行った。

被災者には、近親者の喪失や住居の損失などの急激な環境変化によるストレスや不安により、不眠やうつなどの症状が見られた。治療という名目だと抵抗がある人も多かったため、避難所や仮設住宅を訪問し、健康相談やアドバイスという形で支援した。また、町職員向けに定期的な健康チェックが行われた。

多岐にわたる不安

応急仮設住宅への入居や自宅再建が増えた2012(平成24)年4月以降は、こころのケアチームの活動は岩手県こころのケアセンターに引き継がれた。大槌町では、釜石地域こころのケアセンターの専門スタッフらが現在も活動している。

相談内容は、身近な人を失ったことによる喪失感の増幅や、ローン、生活資金、家族関係や仕事のことなど、多岐にわたった。そのため支援者側は、行政や社会福祉協議会など、地域に根づく団体と連携し、相談内容によって関係窓口につなぐ必要があった。自殺を考える人が増えることを考慮し、自殺予防の活動にもつながっている。

震災を経験した子どもの中には、体調不良や夜泣き、赤ちゃん返りなどの症状が見られることもあった。これを受け県は沿岸地域に「子ども

地域でできる支援を

ものこころのケアセンター」を設置し、児童精神科医による相談やケアを行った。親族や里親に育てられることになった震災孤児・遺児は、児童相談所などが定期的に巡回し、養育環境を確認する体制を整え、支援金や奨学金などの経済支援制度の周知も行った。また、学校ごとにスクールカウンセラーが入り、子どもたちの心をサポートした。

持続可能な支援を目指し、地域が独立して心のケアに取り組みることができ環境を整える必要があった。「認定NPO法人心の架け橋いわて(こころがけ)」は、震災当初から長期的な支援を目指して活動していた。誰にも言えない思いを抱える人たちが寄り添い、話ができる場所をつくらうと、15(同27)年に旧植田医院仮設診療所に「コミュニティーカフェ」を開設し、支援を継続している。ほかにも心の支援事業を行う

地域団体が立ち上がり、音楽や物づくりを通じた心のケアサロンなどを行った。

また、被災して大槌町を離れ、内陸の盛岡市に移り住んだ被災者へ向けた「コミュニティー支援も行われている。「もりおか復興支援センター」では、被災者の悩みに合わせた相談室を設置。週1回「お茶っこ飲み会」を開催し、被災者や支援者が集う機会を設けている。



「認定NPO法人心の架け橋いわて」が運営するコミュニティー・カフェ

Interview

「話を聴く」大切さ
今後もケア継続

岩手医科大学
医学部神経科学講座 教授
岩手県こころのケアセンター 副センター長
大塚 耕太郎^{おおつか こうたろう}さん

震災1年目、こころのケアチームは、岩手医科大学や県立病院、そして他県から応援に入った医師や専門家も含めて30チームが岩手県内で活動しました。現在も岩手県こころのケアセンターでは、地域のスタッフ、役場職員の方々や社会福祉協議会の方々と連携し、こころのケアの活動を続けています。

こころのケアで重要なのは、「話を聴くこと」です。話を聴き、寄り添うことが被災地の人々の安心につながります。特に、被災された方々が安心して相談できるように、丁寧に温かみをもて接する姿勢を心がけておられます。

こころのケアは、県の復興推進プランが示すように、今後も継続していく必要があります。地域でもこころの支援に関わる地域の従事者やボランティアのスキルアップ研修や住民への啓発活動に取り組んでいます。現在も復興事業に携わる地元職員や派遣職員の方々が一生懸命がんばっておられ、私たちもまだまだ支援を続ける必要があると思っています。

応急仮設住宅



浸水区域外の小鎗地区には、町内で最も多い849戸の仮設住宅が建設された

入居地希望通らぬ人も

2011(平成23)年8月をめどにした避難所の閉鎖に伴い、被災者の応急仮設住宅への移行が進められた。津波によって住宅が損壊し、住居を失った人が入居の対象となった。仮設住宅建設に関しては、岩手県が主体となり、一般社団法人プレハブ建築協会と調整を図って建設を進めた。4月には吉里吉里中学校のグラウンドに町内初の仮設住宅が完成。その後、町内各地区で建設が進められ、12(同24)年7月時点で、2106戸の仮設住宅が建設され、4600人余りの町民が入居した。

岩手県では以前から「応急仮設住宅建設可能用地リスト」が作成されていたが、候補地が被災しているケースも見られ、活用できなかった。そのため各市町村職員と連携し、用地の検討から始めなければならぬ状況だった。大槌町では、町民への意向調査をはじめ、仮設団地

となり得る土地の検討や用地交渉、入居に関する手続きや振り分けなどを行った。小さな子どもがいる世帯、身体障害者がいる世帯などの優先枠と、一般の公募枠でバランスを取り、抽選などの方法を取りながら入居の管理を進めた。

町民への意向調査を行う中で、課題が出てきた。仮設住宅を建てる土地は、浸水しない場所であることが第一条件である。しかし、沿岸地区には平地が少なく、仮設住宅を早急に建設できる場所が限られた。赤浜地区では、地権者に地区住民が直接交渉し、9割の住民が震災前と同じ地区内で生活することができた。一方、安渡地区は、一部損壊も含め562戸分の住宅が必要となったものの、地区内に確保できた住宅は、4カ所67戸と必要戸数の12%にとどまり、町内48カ所だけでなく、町外の仮設住宅への入居を余儀なくされた。



吉里吉里中学校のグラウンドに建設されるプレハブの仮設住宅

居住環境の問題多く

入居後にも問題が生じた。建て付けの悪さから起こる、雨漏りや隙間風などに対するクレームが相次いだ。寒冷地対策が不十分な所もあり、冬には水抜きをしても水道管が凍るケースもあった。大槌町の仮設住宅に居住していた元大槌町副町長の大水敏弘おみひろさんは著書で次のように書いている。

〈入ってみての第一の感想は「寒い」

ということだった。特に床が冷たい。真冬でもないのに、歩くと床の冷たさで足が痛くなる。体育館を歩いているかのような。室内には鉄骨が露出し、触れると冷たさが身に染みる。『実証 仮設住宅 東日本大震災の現場から』

また、入居に伴い仮設住宅は各地区から入居した住民たちの「寄り合い所帯」となった。かつてのコミュニティが解体し、高齢者の孤立も懸念された。これらの課題の解決に向け、町内外から100人単位の「仮設支援員」が入り、団地内のコミュニティ形成を支援した。各仮設団地に設置されている集会所や相談室で、お茶会を開いたり高齢の入居者を訪問したりして孤立を防いだ。さらに、大槌町では複数のNPO団体がコミュニティ支援のために立ち上がった。サロンの開設や、気軽に参加できるイベントの開催などによって、コミュニティづくりを支援した。

仮設住宅への入居は当初、自宅を

表6-4 町内の応急仮設住宅の入居状況

区分	2013年5月31日時点 (入居者数最多)	2015年3月30日 時点
住宅戸数	2,106戸	2,100戸
入居戸数	2,057戸	1,767戸
入居世帯数	1,867世帯	1,607世帯
入居者数	4,610人	3,564人
入居率	97.6%	84.1%

失った被災者に限定していたが、大槌町は、Uイーターナー者や復興に貢献したい移住支援者にも門戸を開放しようとして、県や国に要望を続け、14(同26)年4月、地方自治法で規定のある「目的外使用許可」が認められた。仮設住宅の居住期間は原則2年とされたが、震災から約8年を経た19年2月末日現在でも242世帯が入居している。阪神・淡路大震災の仮設住宅解消は5年後だった。

Interview

普通の生活を取り戻すため
進むしかなかった

土橋 清一せいいちさん

当時大槌町地域整備課 課長

震災当時は技術職の経験者として応急対応をしていました。仮設住宅に関しては、町内の地権者を訪ねて用地交渉をしました。

お盆前には避難所から個々の住まいへ移動することが町民や職員の願いであり、目標でした。仮設住宅建設に適した土地を見つけると、近所の方に地主を聞き、その足で地主のところへ交渉しに行き、承諾を頂くことが多かったです。皆さんとても協力的でした。テレビで土地を探している様子が放送された時には、大槌に土地を持つ全国の人たちから「土地を提供したい」とご連絡をいただき、そのお気持ちに本音が伝わった感じがしました。地主の約8割である108人と交渉し、ほぼ承諾を得ることができました。業務にまつらさや苦しさは感じなかったです。やるしかない、普通の生活を取り戻せるように、進むしかない。そのことしか頭になかった。周りからは「だいぶ疲れた顔をしている」とよく言われましたが、自分では気付かないですね。



大ケ口地区に立ち並ぶ災害公営住宅の全景

7割の家屋に被害

大槌町の家屋被害は、全壊半壊、一部損壊を合わせると、4375棟だった。この数は全家屋のほぼ7割に上る。この被害を受け、町と岩手県は被災住民の恒久的な住宅を確保するために災害公営住宅の建設を進めることとなった。災害公営住宅は、被災して住宅を失い、自ら再建することが困難な町民に対し、安定した生活を送ってもらうための公営住宅である。

調査で計画戸数調整

2012(平成24)年1月に、土地利用計画策定の基礎資料とするため、震災後初めてとなる、今後の住まいに関する意向確認調査を実施した。自力再建、高台への移転、災害公営住宅への入居、町外への転出などの希望を把握した。この調査を基に、1035戸の整備目標を立てた。12年12月から翌年3月にか

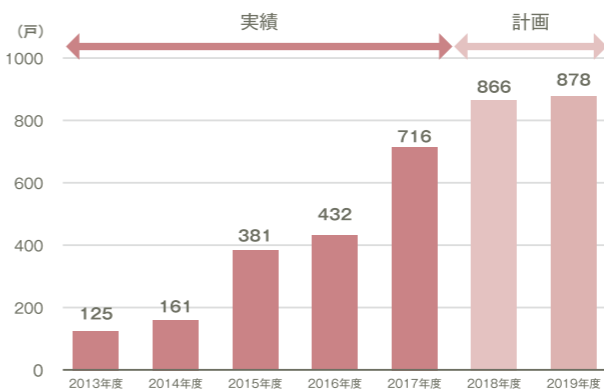


図6-1 災害公営住宅の整備戸数

けて再度意向調査を実施し、14(同26)年12月から翌年3月には「仮申し込み」を受け付けた。仮申し込みでは団地を決定し、「本申し込み」で宅地や住戸を決定する流れとした。本申し込みは供用開始の半年から1年前に実施され、仮申し込みで事前登録を行った世帯が優先されることとした。その後も仮申し込みと意向調査を実施し、計画戸数は当初の1035戸から878戸まで削減した。

18(同30)年10月時点での整備完成戸数は797戸となっており、19年度までに全計画戸数の完成を目指している。

検討委員会の開催

12年8月、町の災害公営住宅の整備計画について総合的に検討を行うため、学識経験者、町議会議員、社会福祉協議会、森林組合、建築士、弁護士、UR都市機構、民生委員、岩手県、大槌町で構成される「大槌町災害公営住宅整備計画検討委員会」が設置された。

同委員会は同月から翌年3月まで計6回開催され、家賃や支援制度、払い下げ価格、供給計画とスケジュール、入居優先基準、入居要件と入居スケジュールなどについて協議。大槌町災害公営住宅整備計画を策定した。

同委員会内には、デザイン部会も設けられ、「大槌町災害公営住宅設計ガイドライン」が策定された。こ

のガイドラインは、全戸バリアフリー設計などとする「大槌町災害公営住宅の基本整備方針」に基づき、建設される戸建て、長屋、集合の各タイプの配置、建物、外構などの計画設計の参考としてまとめられた。

大ケ口が町内初

大ケ口災害公営住宅は町が建設する災害公営住宅としては第1号となり、15(同27)年8月30日から入居が開始された。同住宅は地元産木材を活用し、周辺との調和を意識した低層の和風建築。車いすの使用や高齢者に配慮したバリアフリー設計で、集会所やベンチが設置された広場、大槌町の水資源を生かした井戸を配するなど、随所に工夫が施された。

16(同28)年5月には、大ケ口一丁目町営住宅の自治会設立総会が開かれ、ごみ集積場の清掃、団地内の草刈り、盆踊りや新年会の開催などを決めた。各仮設住宅から転

居してきた住民らが集まる機会を増やして交流を深め、自治会設立に向け、気運を高めた結果だ。災害公営住宅の入居者は、震災直後の避難所とその後の仮設住宅を経て、生活環境と人間関係が二度、分断されている。コミュニティの再構築は、非常時から平時への移行期における課題の一つである。



地元産の木材を使った温かみのあるデザインの大ケ口災害公営住宅

Interview

震災から8年 独居高齢者が心配

大槌町環境整備課 技師
(東京都武蔵野市から派遣)

伊藤 聡 さん

災害公営住宅は、単身世帯の入居を見込んで1DKの間取りの部屋を用意しましたが、あまり人気がありませんでした。町外に住む家族や親戚が泊まることができるよう、最低でも2DKの間取りを望む人が多く、現在は1DKの空き部屋が増えています。また、ファミリー層は長屋タイプよりも、戸建てタイプの意向が強い傾向があります。そのため現在、町が建設する災害公営住宅については、長屋は2DK、戸建ては3DKとしています。

管理上、家賃制度が複雑であるため町民に対してどのように制度を把握していたかが課題でした。2019(平成31)年度以降、家賃の減免制度が終わるため、家賃が高くなる住民の方もいるでしょう。震災から8年が経過し、入居時は元気でしたが、入居後亡くなった高齢の方もいました。独り身で家族や親族がいな方もおり、死亡届の作成に苦慮することがあります。このようなケースは今後も増える予想されます。



2012年9月、新おおつち漁協が発足して初めて定置網の水揚げがあった

民間支援で漁船復興

新しい定置網漁船瀬谷丸（19トンは、町の水産業を支える定置網に必要な漁船で、横浜市瀬谷区の住民らの募金活動により3625万円が寄せられ、建造費の一部に充てられた。進水式は13（同25）年6月15日、大槌漁港で行われた。瀬谷区の住民とは、区内七つの小学校でこの漁船が水揚げしたサケを給食に提供するなど、現在も復興支援目的の交流が行われている。また、新定置網漁船第一久美愛丸は、公益財団法人国際開発救済財団（FIDR、ファイダー）からの支援で建造され、13年8月23日に大槌漁港で進水式が行われた。

今後の水産業

震災後、漁業生産の一定量の回復は見られるものの、水産業を取り巻く環境は厳しさを増している。豊かな漁場に恵まれた三陸沿岸も、

表6-5 水産関係被害

区分	被害額(千円)	被害数
被害額合計	5,127,927	—
水産施設	1,177,644	6カ所
漁船	2,204,486	672隻
漁具(定置網)	874,460	3カ所
養殖施設	543,859	540カ所
水産物	327,478	1,876t

近年は温暖化の影響などで海が「やせて」きている現状がある。例えば、夏以降に海水温が下がらないなどの原因で、サンマやサケが接岸せずの不漁傾向が続く。17（同29）年度の水揚げ量は約180トんで、震災前の10（同22）年度の2割にも満たなかった。養殖を含む沿岸漁業は単に生業を支えるだけでなく、漁場の管理や環境保全活動、おすそ分け文化に貢献するほか、漁港周辺を祭り

被害額は51億円超

震災は町の主要産業である水産業に深刻なダメージを与え、大槌と吉里吉里の両漁港、魚市場や養殖施設、漁船などが大きな被害を受けた。被害総額は51億2792万円に上る。

大槌漁港と吉里吉里漁港は震災後、防潮堤や水門の復旧整備工事を行い、魚市場は2011（平成23）年11月に再開された。大槌町に限らず、三陸沿岸の復旧対応で漁業者に対し相対的に優遇された施策が集中的に投下されたことは、特色的だった。しかし、漁船は672隻の被害に対して、計画数の100%である237隻の整備にとどまり、漁業者数そのものが激減した。その要因の一つは、大槌町漁業協同組合が震災前に5億円の負債を抱えていた上に、震災被害で特別損失が発生し財務状況が悪化した結果、自主解散したことである。新おおつち漁業協同組合が12（同

やイベント会場で活用するなど、地域活動を支える社会基盤としての役割も大きい。

町は地方創生事業の一環として、生産や養殖、加工、販売を一体的に進める「六次産業」的な施設の建設や、水産物や製品に高い付加価値を付ける方策を進めている。生産量自体は減少しているが、漁業が果たす機能を廃れさせないために、漁業者と地域の理想的なあり方について官民挙げて模索が続く。



2013年6月15日、晴れて進水した瀬谷丸

Interview

悲観せず
販売促進に尽力

越田鮮魚店 代表

越田 俊喜さん

越田鮮魚店は、1978（昭和53）年に開業した鮮魚店です。震災で安渡の店舗が流失しました。その後、金沢地区の一軒家を借りて、沢の水を利用して水産物の加工と販売を再開しました。その時は、「山の中の魚屋さん」と呼ばれていましたね。安渡と金沢は、車で30分ぐらいかかるけど、海と山がある大槌ならではの特徵だし、これをもっとPRしてもいいと思う。2016（平成28）年7月に現在の安渡の魚市場の近くに本格再建しました。

私は、以前は別の加工会社に勤めていましたが、震災を機に商品の需要も増え、販売の付き合いも広がりました。家族総出で対応に当たらないとお店が回らないこともあり、両親が営んでいた店で一緒に働くことにしました。あの時ほど、家族の力強さを感じたことはない。震災後は、特に以前はよく獲れていたサケなど、時季のものが当てにならない状況だけに、悲観することなく、三陸ならではのものを新商品開発に挑戦し、インターネット販売にも力を入れていきたいです。

24）年3月1日に発足したものの、組合員数は震災前の11年3月1日時点では859人だったのに対し、震災後の18（同30）年3月31日時点では259人と、3分の1に減った。これは、震災前に漁業権のみ保有し実質的な漁を行っていなかった人たちの整理も兼ねた結果である。養殖施設は540カ所の被害に対して、整備計画数の100%である580カ所が復旧し、微増している。

2018年3月31日時点での町内の水産加工業者
ナカシヨク、伊藤商店、浦田商店、ゼネラルオイスター、平庄、小豆嶋漁業、及順商店、たかのり海産、六串商店、あさひ堂、石山水産、小野食品、仲間、中里商店、越田鮮魚店、芳賀鮮魚店、魚よし、タイヨー、ひよつたん島苦屋、河合商店



原発事故被害から復旧した、大槌町の特産品である原木シイタケのほだ木(2019年4月撮影)

農地15ヘクタールに被害

大槌町では、水田と畑を合わせて15ヘクタールが津波被害を受け、災害査定が行われた。復旧対応で人員が不足している町役場に代わり、県職員や岩手県土地改良事業団体連合会、岩手県土地改良設計協会などの専門技術者で構成されている「農地・農業用施設災害復旧支援隊(通称NSS)」が災害査定を行った。その後、農地の復旧や除塩が行われた。

避難路となった林道

大槌町では、6路線16カ所の林道に被害があった。そのうち3路線(古廟伸松線・吉里吉里線・五本松峠線)は、国の災害査定を受けた後、復旧工事を行った。『東日本大震災林道の被害と復旧の記録』(発行・岩手県農林水産部森林保全課)によると、釜石市栗林町と小鎚地区を連絡する林道である五本松峠

線は、小鎚地区から遠野市および釜石市方面への避難路として機能した。また、小鎚地区から城山公園を経て大槌地区に連絡する城山1号2号線は、中央公民館付近まで及んだ火災を逃れて小鎚地区や金沢地区へ移動する人々の2次避難路となった。さらに、国道45号のがれきが撤去されるまでの間、中央公民館に設置された災害対策本部につながる唯一の道路として活用された。

表6-6 農林関係被害

区分	被害額(千円)	被害場所
被害額合計	881,741	—
水田	424,000	10ha
畑	175,000	5ha
用水路	4,000	20カ所
道路	7,000	20カ所
林野	225,000	301ha
林道	46,741	6路線

経営者は減少傾向

町内の農家数、林業経営体数は減少傾向にある。2015(平成27)年における農家数は1995(同7)年と比較して150戸減少、林業経営体数は2005(同17)年と比較して180戸減少している(図6-1、2)。大槌町内の16(同28)年の農業産出額は、11(同23)年に比べ5千万円増加している(図6-3)。

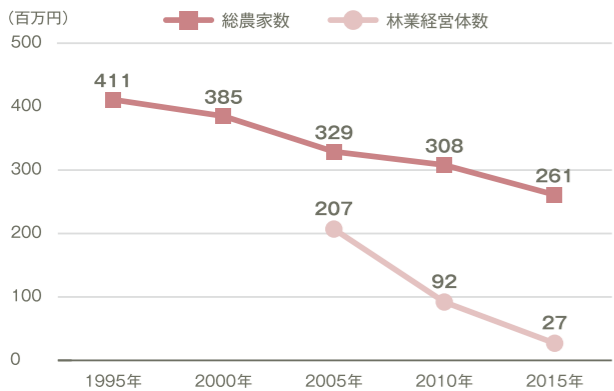


図6-2 農家数・林業経営体数の推移

農林水産省「農林業センサス」を基に作成
※各年2月1日現在

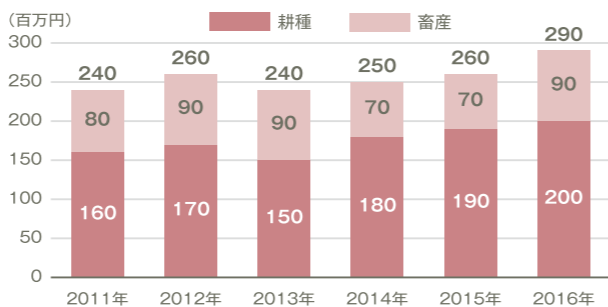


図6-3 大槌町農業産出額の推移

平成25年までは東北農政局「被災市町村別農業産出額」、平成26年以降は農林水産省「市町村別農業産出額(推計)」を基に作成
※合計と内訳が一致しないのは、表示単位未満を四捨五入しているためである

農業拠点の開設

16年1月15日、沢山地区に「大槌町沿岸営農拠点センター」がオープンした。復興交付金を活用して町役場が建設し、花巻農業協同組合が管理運営を担う、町内の産地直売所の拠点施設である。センター1階には農産物直売所、レストラン、JAいわて花巻大槌支店、2階には研修室を配置。農作物の卸しから、

販売、金融などの農業に関する相談までを1カ所で行うことができ、施設となっている。

シイタケに原発被害

東日本大震災の二次災害である福島第一原子力発電所の事故は、大槌町の農作物にも影響をもたらした。特産品である露地栽培の原木シイタケから基準値を超える放射性セシウムが検出され、12(同24)年4月25日、国による出荷制限指示が出された。また、この年に生産された干しシイタケは、同年5月23日に県による出荷自粛要請が行われた。牧草についても町の南部地域に対し、県による出荷自粛要請が行われた。

15年4月10日から、露地栽培の原木シイタケに関しては、生産物の安全が確認できた生産者のみ出荷できる一部解除が行われた。18(同30)年9月18日現在、15軒の生産者が出荷解除の対象となった。

Interview

規制値以下の環境探し 原木シイタケ栽培を再開

原木シイタケ生産者

兼澤 平也さん

震災があつて、放射線の影響で原木シイタケが全部出荷停止になった。探っていたものも、全部廃棄。もうショック。だつて作ったものを売れないんだもん。栽培をやめた人もいっぱいいた。それから不安なまま1年間過ごした。栽培できないなら、われわれはこれからどうやって生活するのって。

それで当時、県の職員と、国で決めた放射線の規制値以下の木を使って栽培できる場所を探したら、たまたま金沢地区に場所があつた。その山を買って、また栽培を始めることにした。

2013(平成25)年に植菌を再開したけど、やつてすぐ採れるわけじゃない。環境が整って安定して採れるまで、6年かかった。だから、ようやく最近、完成したのよ。でも、自分が歳を取ってしまった。これから10年はシイタケが採れる。それまで健康で働ければいいですけど、そうでない場合は、全部捨てなきゃいけない。今から子どもに任せるのも厳しいから、80歳まではやらなきゃいい。



被災したシーサイドタウンマストのリニューアルオープン日は多くの人でにぎわった

被害額、140億円超

大槌町の商工業は震災で建物や設備に大きな被害を受け、商業関係と工業関係の被害額合計は140億円を超えた(表6-7)。

商業の状況を見ると、震災後の2012(平成24)年は、07(同19)年と比較して事業所数、従業員数が8割以上減少。年間商品販売額も8割近く減っている(図6-4)。

工業については、11(同23)年は、10(同22)年と比較して事業所数が6割以上、従業員数は7割近く減少。その後は徐々に増加し、15(同27)年の事業所数は24カ所、従業員数は555人。製造品出荷額は、前年に比べて4億9500万円の増加となった(図6-5)。

人口減続き、難局も

震災前の大槌商工会の会員は442事業所であり、その8割に当

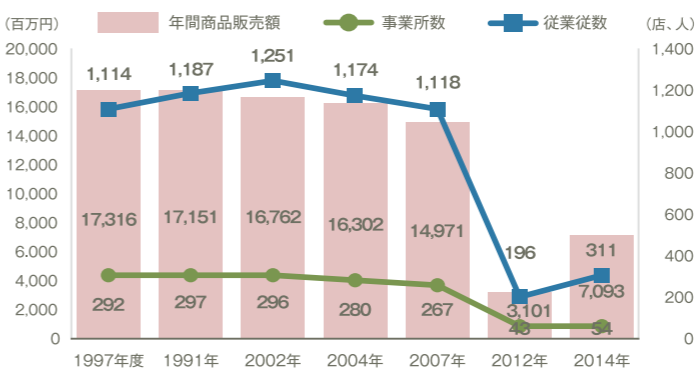


図6-4 商業の年間商業販売額・事業所数・従業員数の推移 震災前後の商業の比較

表6-7 商工関係被害

区分	商業関係	工業関係
被害額合計(千円)	14,039,490	
土地(千円)	—	—
建物(千円)	4,405,350	2,102,300
什器備品・機械設備等(千円)	1,793,610	3,643,390
商品・原材料製品等(千円)	995,290	1,099,550
小計(千円)	7,194,250	6,845,240

*2012年2月1日現在

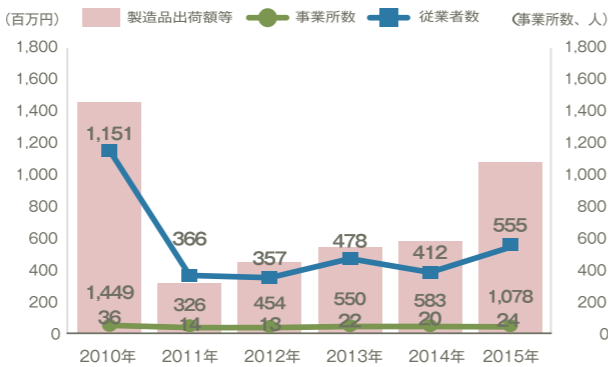


図6-5 工業の製造品出荷額等・事業所数・従業員数の推移 震災前後の工業の比較

を実施した。

それから1年間で、同商工会では、

①店舗再建支援②金融支援③商業復興ビジョン策定——の三つが事業の柱となった。①は、会員に対し、独立行政法人中小企業基盤整備機構(中小機構)による仮設店舗の同居支援や、グループ補助金活用事業者支援を行った。②は日本政策金融国庫融資補助や二重ローン対策などを行った。③は大槌駅前から城山までのエリアに図書館や公共公益施設、商業施設が配置された計画となったが、その後の復興まちづくりで、御社地に町文化交流センターなどが建設されたため、実現には至らなかった。

たる387事業所が被災した。町中心部の大町にあった同商工会の建物は、津波により全壊した。11(同23)年3月28日から、大ケ口地区で被災を免れた場所にあった商工会長の菊池良一さんの自宅を間借りして業務を再開。商工会員のデータは津波によって流失したが、岩手県商工会連合会が所有していたデータを活用し、会員の安否情報の確認と事業再開の意向確認作業

「マスト」再開

大槌商業開発株式会社が運営する「シーサイドタウンマスト」は、1993(同5)年10月に小槌地区にオープンした複合型のショッピングモールである。津波により大きな被害を受け休止したが、リニューアルして、11年12月に営業を再開した。岩手県中小企業等復旧・復興支援事業費補助金(通称グループ補助金)の1次公募で採択され、比較的早期の再開にこぎつけた。

Interview

若い世代の新しい挑戦に期待

大槌商工会 会長

菊池良一さん

2018(平成30)年9月の町の広報誌に、町民アンケートの結果が掲載されていました。町への定住意向について、60%が「このまま住み続けたい」、10%が「町外に住みたい」、約25%が「分からない」という結果でした。町外への移住を検討している人が予想以上に多く、さらに減ることが予想されます。

工業は、復興事業により建設業を中心に復興してきましたが、商業の復興はまだまだという印象です。特に、中心街の町方に食料品や日用品の店が少ない印象があります。震災前は歩いて何でも買えることができましたが、今は車がないと買えない物が増えています。町の中心に人を増やすためには、買い物環境を改善する必要があります。高齢者が多くなることを考えると大変です。

後継者の問題もあります。私が知る中で末広町商店街で後継者がいるのは、菓子店のエルマーノさん一軒のみ。若い世代には、新しい事業にどんどんチャレンジしてほしいと思っています。

仮設商店街・事業所



福幸きらり商店街オープンの様子

事業者への支援

被災した店舗や事業所の再建を促すため、国は「仮設施設整備事業」を展開した。同事業は、市町村からの要請に基づき、中小企業基盤整備機構（中小機構）が仮設施設（店舗事務所・工場など）を整備し、市町村を通じて事業者に貸与するものである。大槌町でも同事業が活用され、仮設商店街と事業所の建設が行われた。

建設までの流れは次の通り。2011（平成23）年4月23日に中小機構が大槌商工会を訪問し仮設店舗制度の概要を説明した後、5月6日に第1回の中小機構仮設店舗説明会が開催された。会場の役場仮庁舎会議室は参加者120人であふれた。この場で「中小機構仮設店舗ニーズ調査票」が配布された。同調査で、希望する地域や広さ、階数などを把握。出店を希望する事業者の数は109だった（表6-8）。

7月以降、仮設商店街・事業所の建設に向けた動きが本格化した。建設着工までは、被災を免れた用地の確保が課題だった。仮設住宅団地から比較的近い内陸寄りの遊休地などの地権者に交渉。次の7カ所の仮設店舗・事業所の用地を確保し、12月までに全てがオープンした。

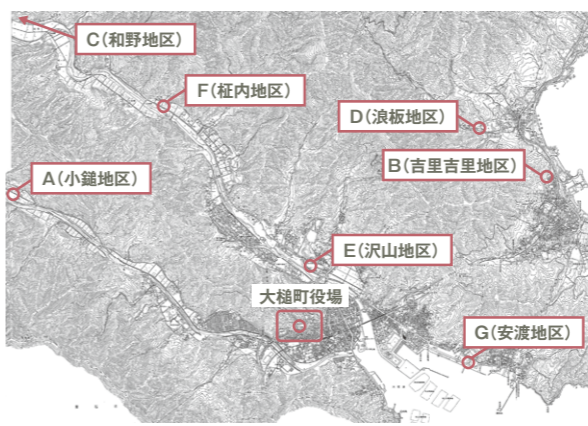


図6-6 仮設商店街・事業所の位置

幸きらり商店街（同図E）▽大槌町産業復興団地（同図F）▽大槌町漁港地区仮設施設（同図G）。

開設から閉鎖まで

11（同23）年10月以降、各仮設商店街・事業所の建設が急ピッチで進んだ。最も早い完成は、吉里吉里地区のニコニコ出合いの広場（3区画）と浪板地区の浪板真心SHOP（2区画）で10月3日。同年12月までに全ての仮設商店街・事業所が完成した。

大槌北小福幸きらり商店街は、44区画の町内最大の仮設商店街。旧大槌北小学校のグラウンドに造成された敷地は、駐車場が中央部にあり、その周りを施設がコの字型に取り囲むように配置された。12月にはオープンイベントが開催され、大勢の人が集まって抽選会や郷土芸能の披露、餅まきなどの催しが行われた。

その後、大槌町産業復興団地（概

内地区）と大槌町漁港地区仮設施設（安渡地区）は、16（同28）年8月から9月に、最も早い撤去期限を迎えた。その他の仮設商店街は、18（同30）年の9月が撤去期限となった。ただし、大槌北小福幸きらり商店街については、町の復興事業や業者手配の遅れなどによって、撤去期限内に再建が困難な事業者に限り、20（令和2）年3月まで延長されることとなった（表6-9）。

表6-8 仮設店舗・事業所事業所までの開設の流れ

年月	内容
2011年	
4月23日	中小機構が大槌町役場に来訪し、仮設店舗制度の概要を説明
5月6日	大槌商工会主導で中小機構仮設店舗説明会を開催。出席者約120人
5月6日～5月19日	中小機構仮設店舗ニーズ調査票のとりまとめ。希望数109店
5月20日	中小機構仮設店舗ニーズ調査票を大槌町役場に提出
7月13日	第2回中小機構仮設店舗説明会を開催。入居事業者への説明会
7月以降	仮設店舗建設へ向けた動きが本格化（用地交渉と取得、店舗の配置等）
10月～12月	各仮設店舗・事業所が随時完成

大槌商工会提供資料を基に作成

表6-9 仮設商店街・事業所一覧

施設名称	施設用途	区画数	完成日	撤去期間
わらびっこ商店街	店舗、事務所	10	2011年11月9日	2018年9月
ニコニコ出合いの広場	店舗、事務所	3	2011年10月3日	2018年10月
恵水講スマイル商店街	店舗、倉庫	4	2011年11月7日	2018年10月（2018年4月に撤去済み）
浪板真心SHOP	店舗	2	2011年10月3日	2018年10月
大槌北小福幸きらり商店街	店舗、倉庫	43	2011年11月25日	2020年3月（許可された事業者に限り、2018年9月から延長）
大槌町産業復興団地	店舗、事務所、工場	19	2011年11月14日	2016年8月（2017年2月撤去済み）
大槌町漁港地区仮設施設	工場	8	2011年12月26日	2016年9月（2016年2月撤去済み）

中小機構提供資料を基に作成

Interview

仮設商店街が子どもたちの居場所に

岩喜酒店 店主

岩間 充さん

恵水講スマイル商店街に約5年半入居していました。恵水講スマイル商店街には、私たちの店のほかに、鮮魚店と美容室、飲食店がありました。私たちの店と鮮魚店は本設再建ができましたが、美容室と飲食店はまだできていません。仮設商店街の近くには、町で最も多くの被災者が入居する仮設住宅団地がありました。震災前は、町方に住んでいた方も多かったのですが、顔見知りも多く安心しました。近くの仮設住宅に住む子どもたちが、仮設の部屋が狭いために、宿題を持ち込んで利用することもありましたね。そのために、駄菓子を置いたりもしました。

子どもがいる世帯の自宅再建や災害公営住宅への入居が進んで、仮設住宅を離れるようになり、子どもの利用もほとんどなくなってきました。町内には、未だに本設の店を再建できない事業者もいます。再建しようとしても土地がなかったり、資金が不足したりしている人もいます。その人たちにも早く再建してほしいと思っています。



2011年、被災後も途切れることなく行われた大槌まつり

震災の年、祭り敢行

町内には21の郷土芸能団体がある。多くの団体は津波で道具や衣装、山車などが流失、さらに津波の後の火災で拠点焼けた所もあった。「大槌まつり」は毎年9月、町内にある二つの神社（大槌稲荷神社、小鉈神社）の例大祭を行うものである。メインの神輿渡御行列では、神輿を中心に大神楽、鹿子踊、虎舞などの郷土芸能団体のほか、各地区の手踊り団体などが連なっており、町中に繰り出す。

小鉈神社の宮司松橋知之まつはしともゆきさんは、「震災直後、大槌まつりは10年くらい開催できないのではないかと思っていた。震災から2カ月後の5月、神輿を担ぐ人たちでつくる『社人会』の関係者が訪れた時に、境内の中だけでも神輿を出したいと私が話したところ、その方に『宮司がその気なら、俺がなんとかする』と言われ、祭り実行に向けて動き出した」と振り返る。他の郷土芸



2011年の大槌まつりで披露された郷土芸能の鹿子踊

能団体からも祭りに参加したいとの要望があり、9月24日と25日、避難所になっていた大槌稲荷神社は祭りを取りやめたが、小鉈神社のみで開催した。小鉈神社祭典には町内11の郷土芸能団体が参加し、境内の中だけで行われた。松橋さんは「祭りの実行については反対の声もあつたが、圧倒的に『やってほしい』という声が多かった。皆さんが涙を流しながら神輿を担いだり、踊ったりしていたのが印象的だった」と語る。

いうことを伝えていきたい」と話す。

2012(平成24)年からは、例年通り大槌稲荷神社と小鉈神社で開催されている。18(同30)年には、桜木町の手踊り団体が復活し、震災前と同数の21団体が参加した。また、漁の安全と大漁を祈願して大槌稲荷神社で古くから行われている「引き船」が8年ぶりに復活した。吉里吉里地区の「吉里吉里まつり」も震災の年の8月に敢行された。

蓬莱島の復興

大槌湾に浮かぶ蓬莱島は、赤浜地区から最も近い小島であり、震災後の13(同25)年に町の名勝第1号に指定された。作家の故井上ひさしさん原作の人形劇「ひょうこりひょうたん島」のモデルとされる。蓬莱島弁天神社は「弁天様」とあがめられる弁財天像を祀り、赤い灯台と共に、漁の安全と豊漁を祈願する、町のシンボルだった。しかし、震災で灯台や神社の社殿、鳥居が崩壊するなどの大きな被害を受けた。

赤浜地区に住む岡本大作おかもとだいさくさんは、震災から2カ月後、初めて蓬莱島に船で渡った。鳥居などは流失していたが、弁天様は傷つきながらも社殿の中に残っていた。岡本さんら地元有志が集まり、蓬莱島を復興させるため、13年5月に「ひょうたん島復興プロジェクト」を立ち上げ、全国から支援金を募った。集まった多くの支援金は、弁天様や鳥居、参道の修復に活用された。弁天様は仏師が約8カ月かけて修復し、14(同26)年8月に町に戻った。16(同28)年4月には、震災で休止していた「ひょうたん島まつり」が復活。改修を終えた社殿に弁財天を再び安置する遷座祭が行われた。また、12(同24)年には海上保安庁が灯台を、14(同26)年には岩手県が赤浜地区から蓬莱島へ歩いて渡ることができ、防波堤をそれぞれ再建した。岡本さんは「蓬莱島は大槌の象徴のような場所なので、再興がとてものうれしい。ご恩を忘れず、皆さんの支援のお陰で祭りを再開できた」と



灯台や防波堤の整備、弁天様の修復を経て、今も町のシンボルであり続ける蓬莱島(2017年撮影)

Interview

自分にできることは「神主であること」

小鉈神社 宮司

松橋 知之まつはし ともゆき

震災の翌朝、避難していた中央公民館から小鉈神社を見下ろすと、火事のため煙で何も見えず、神社は燃えてしまったのだと思いました。しかし、3月14日の午前中、神社が無事であるという一報が入り、近所の方と一緒に神社に戻ることを決めました。山を越え、神社が見えた時はとてもうれしかったです。神社は奇跡的に津波の被害も火事の被害も免れました。後から聞いた話ですが、私が中央公民館に行った後も5人ほど神社に残っており、沢水を使って消火活動をしたそうです。最後は折ったとも聞いています。

その後、何もなくなった町で自分何ができるかと考えたとき、神主の仕事しかないと思いました。4月1日に「月次祭」を行い、震災後初めて装束に袖を通したことが印象に残っています。大槌まつりは続けていくことに価値があると思います。郷土芸能が継承されていくことで、地域にもつながりが生まれると感じています。

応援職員の活動



2012年9月28日に赴任した応援職員への辞令交付式

段階で異なる理想像

復興の各段階で求められる職員の技能は自ずと異なる。緊急対応期は、あらゆる行政業務の能力を兼ね備えるオールラウンダー型の職員が理想的なのに対し、復興事業が本格化してくる時期では、各事業に対応できる専門技能を持った職員が求められる。

プロパー(正)職員と応援職員が規模災害の中、手探りで協力しながら行政運営に当たるといふ取り組みを分かち合ったことで、新たな縁も生まれている。現役と元の応援職員らによって「応援職員の会」が13(同25)年3月に設立された。同会は応援職員が派遣元に帰任しても、大槌町職員との交流の輪を広げながら町の復興を支援する目的で活動。派遣元の自治体で大槌町特産品の販売会を開いたり、末広町商店街の「よ市」など町内で行われる各種イベントに参加したりしている。

民間からの職員派遣

町は自治体からだけでなく、民間企業などからも応援職員を受け入れた。採用した企業は時系列順に▽新日鉄住金ソリューションズ株式会社(当時)▽日本ユニシス株式会社▽鹿島建設株式会社▽東京大学(一企業として採用)▽独立行政法人都市再生機構——であり、各企業から1〜2人を任期付きおよび派遣職員として受け入れた。システム構築や都市計画など、各企業の専門的な知識やノウハウを活用し、町の復旧復興を支えた。

特に、情報システムに関する専門知識を持つ日本ユニシスの派遣職員は、震災後に混沌としていた情報の整理に大きく貢献した。県の「被災者支援システム」を活用して被災者情報の入力・管理を行い、復興に向けて増えていった各種補助金の支給手続きの効率化につながった。

業務増大で職員確保

震災で多くの町職員が犠牲となり、被災した町の復旧業務は思うように進まなかった。当初は岩手県沿岸広域振興局や同県市町村会が調整を図り、3〜4日のローテーションで県内各自治体から職員が派遣され、職員数が不足している部署の業務を補った。4月からは被災者の対応や復旧業務に加え、通常業務も再開したため業務量が増大。長期間常駐できる応援職員の確保が必要になった。

職員派遣は、総務省を通して全国市長会や全国町村会、提携関係にある自治体などに要請。これに応じた自治体とそれぞれ職員派遣協定を結ぶ形で派遣を実現した。現在でも職員が不足しているなどの事情から派遣要請をしているが、全国自治体での慢性的な人材不足や近年の自然災害の多発もあり確保が難しい状況にある。

大津波で役場庁舎が被災し、あ



2013年3月、「応援職員の会」の設立総会が行われた



応援職員の派遣元の自治体の一つである川越市で行われた、大槌町の物産販売会(小林武さん提供)

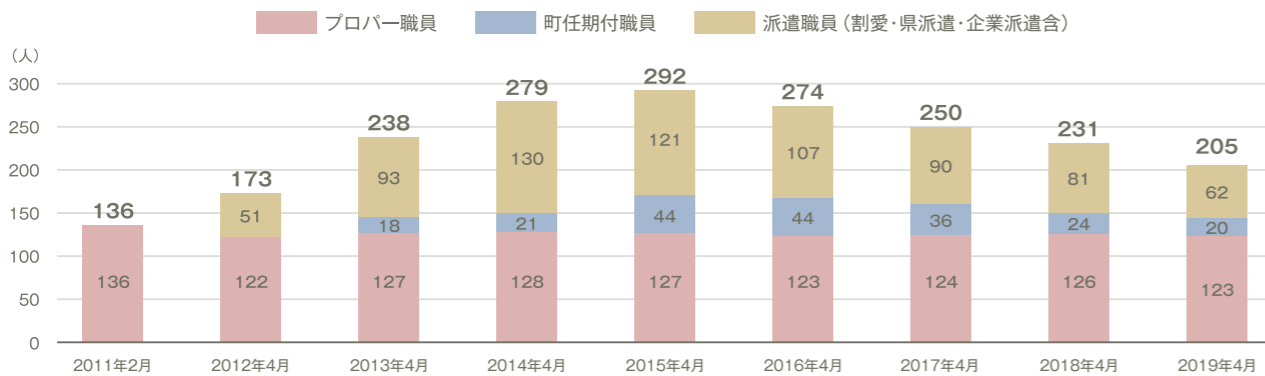


図6-7 大槌町職員数の推移

らゆる文書が流失したため、派遣自治体の文書や事務マニュアルを参考に業務の流れを整理した。また、地域整備課の正職員9人のうち7人が犠牲になり、復旧業務のノウハウを持つ職員が不在だったため、同業務を担う土木系職員の確保が急務となった。2013(平成25)年度からは、専門的な知識や技能を持つ人材の確保を目的に、最長5年の任期で任期付職員の直接雇用も始めた。

応援職員の役割は多岐にわたった。一方、現場で求められる技能・知識と派遣職員の専門分野がうまくマッチしないケースもあった。応援職員は環境も風土も異なる大槌で、被災者の抱える深刻な問題に連日向き合っ苦悩や葛藤に囚われ、心身の不調を訴えることも少なくなかった。「岩手こころのケアセンター」は12(同24)年から役場内に定期的に相談会場を設け、職員のケアを行っている。

Interview

大槌をまるごと
好きになった1年間

現埼玉県川越市都市計画部
都市計画課 課長

小林 武さん

震災直後に宮城県東松島市に保健師と
共に行く機会があつて、町が壊滅している
状況を見て衝撃を受けました。次の年の
1月に川越市役所の上司から区画整理経
験者の被災地派遣の打診があつた時、すか
さず応じました。そしてその年の4月から
1年間、大槌町の復興担当として、新設さ
れた都市整備課で町方地区と沢山地区を
担当する班長をしていました。

当初のスケジュールは「9月までに都市計
画を決定して年度内に事業認可を取る」。
合意形成もあるし、通常の手順でいけば2
年のはかかる。経験のないタイトさに、不安
な気持ちでスタートしました。用地交渉の
相手が被災者だというのが難しかった。
一日も早く復興計画を立て、将来への道
筋を示していくのが必要だと思ひました。
仮設団地を毎日回ったり、遠方に避難して
いる方のために各地で説明会を開いたりし
ました。遅れも出ましたが、曖昧な言い方
は避けました。
川越に戻ってきてからも「うちからでき



る支援はないか」と考えて、ワカメとか新
巻きサケとかを大槌町の事業者から買い
付けし、川越で大槌町の物産展を開いてい
ます。当時の派遣仲間や川越に住む大槌
町出身の方たちと集まる場ができて、みん
なで大槌町の話ができるのが楽しくて。こ
ういった出会いがとてもうれしいです。大
槌町で過ごした1年でたくさんの方と出会
い、大槌町が大好きになりました。なか
か忙しくて行けないのですが、行くたびに
変化していく町を見ることがうれしいです。
私は、大槌と川越の絆は永遠だと思つて
います。みんな思はずと続けているし、
ずっと応援しています。

Interview

これまでの業務経験を生かし
古里の復興に向けて一歩ずつ

現岩手県農林水産部競馬改革推進室(新庄駐在)
主任主査

佐藤 達哉さん

私は大槌町出身で、生まれ育った古里の
復興に携わりたいと思ひ、震災の年の5月
から約1年間、岩手県からの派遣職員と
して大槌町に入りました。

前半の半年間は総務課で、人手が足りて
いない業務があればなんでも進んで対応し
ました。まず5月末に秋篠宮ご夫妻が被災
地のお見舞いにご来町された際には、宮
内庁、県、関係市町と連携して日程や訪問
先などの調整を行いました。また、被災さ
れた町民の皆さんが避難所から応急仮設
住宅に移られた後は、「広報おつち」配
付の機会を通じて、要望や相談事をお聞
きし、役場担当者や情報共有するよう努
めました。後半の11月からは、教育部長兼
教育次長を拝命し、小中一貫教育、学校
再編に関する説明や学校建設場所の提案
を行いました。

出身地とはいえ、町の業務は初めてのこ
とでしたが、大切なご家族を亡くしたり、
ご自宅を失ったりしながらも町民に寄り添
い懸命にがんばる職員の姿に、できる限り



力になりたいと思つていました。これまでの
業務経験やつながりを生かし、町民、役場
職員、他の自治体からの派遣職員の皆さん
にご協力を頂きながら業務に取り組みま
した。
私は応援職員として大槌町に入った身
ではありませんが、役場職員の皆さんにとつて
県内外から来た応援職員の方々と一緒に
業務に当たることは、進め方やノウハウを
吸収することができる貴重な学びの機会
であり、今後の財産になっていくものと感
じています。古里である大槌が、震災から
の復興を成し遂げ、全国に誇れる町とな
ることを祈念し、これからも応援してい
きます。

Interview

大槌で出会った人たちは
これからも大切な友人

現二戸市総務部 総務課 主任

近藤 歩美さん

震災の時は二戸市役所の子育て支援ク
ループにいました。大槌に派遣職員として
入ったのは、震災から約1年後の4月。震
災直後に「何か支援したい」と思ひ、派遣
職員の募集を見ていたのですが、自分にで
きる仕事がなく、1年後にやっと保育所
関係の仕事の募集を見つけて、「これなら
自分のやてきたことが生かせる」と思ひ、
応募しました。派遣先は福祉課で、業務
は主に保育所の入所手続きや運営費の支
出事務などでした。

大槌は二の園が被災して全壊状態で、
福祉課はイレギュラーな対応が続いていま
した。そのため、次に担当になった人が通
常業務を行える環境を整えたいという思
いで1年間仕事しました。被災前と同様、
誰が来ても引き継げるように仕事の流れ
を作り、資料も残していくということが第
一でした。
福祉課の人たちとはとても仲良くさせ
てもらいました。また、派遣仲間とのつな
がりも深く、今も親交が続いています。



みんなで大槌に集まったこともあり、
交わるはずのなかった全国各地の人とつな
がる、とても不思議。震災をきっかけに
して得たつながりを今後も大事にしてい
たいです。
どこまで行けば「復興した」と言えるの
か分からないけれど、一人一人が「復興し
たな」と思えるまで、できることがあれば
協力したいと思つています。それまで無理
せず一緒にやていきたいと思います。皆さんに
伝えたいです。地域のつながりを大切に、
みんなでささやかな幸せをつくりたい
ような町になつてほしいです。

Interview

「また一緒にがんばりたい」
だからここへ帰ってきた

現大槌町都市整備課 課長

川野 重美さん

鹿児島県南さつま市から大槌町への派
遣職員第1号として、2012(平成24)年
4月から1年間着任しました。当時、鹿
児島県庁から被災地への職員派遣を要請
する通知が来ていて「私にできることがあ
るなら」と手を挙げました。その後、大槌
町への派遣が決定しました。

私が着任した時には、すでに復興計画
が完成し、業務が動き出すところでした。
主な仕事は都市計画事業の手続きや工事
の進捗管理、町民の方の意向調査などで
す。防災集団移転促進事業では、赤浜や
安渡、吉里吉里で、それぞれの移転先の用
地確保に動きまわりました。法的な手続きで反
対意見が出ると努力は要りますが、それ
らが大事に反映されるよう計画の練り直
しもしました。

1年間の派遣業務が終了して鹿児島に
戻つてからも、大槌のことが気になってい
て。大槌の職員も不足していて、宅地整備も終
わっていない状況を知っていたので、定年後、
18年4月に再び大槌に戻ってきました。自



分が携わってきた計画の行方を、見届けた
いなという思いです。
最初の派遣では町づくりがメインでした
が、今回は被災した旧役場庁舎の解体作
業に携わることにになりました。震災遺構
の役割を巡って、早い段階で町の方針が出
ていたら、もう少し早い解決方法があつた
んじゃないかという思ひがあります。解体、
保存、どちらも正解。複雑な気持ちです。
災害はどこでも必ず起こる。被災した
自治体の支援に行けば、いつか自分たちの
有事のときに返ってくる。お互い助け合つて、
協力者になることが大事です。震災当時、
一緒に働いてきた大槌の職員たちと、また
がんばっていきます。

おおつちありがとう ロックフェスティバル

東日本大震災で大槌町を支援してくれた全国の人たちに「ありがとう」の気持ちを伝えたい。

その思いから、2012(平成24)年6月に開催された。それ以降、毎年連続で行われ、

音楽を通してたくさんの方が大槌町に集う場となっている。

Interview | おおつちありがとうロックフェスティバル 元実行委員長 ^{ふるだて きみお}古館 王士さん



2012年に開催された「おおつちありがとうロックフェスティバル」には多くの方が訪れ、熱気に包まれた

自分たちは元気だ

そして、ありがとう

気持ちをフェスで伝えたかった

震災後は、暗い気持ち、悲しい気持ちが大槌に蔓延していた。避難所においても気持ちが暗くなるばかりだし。浪板に漁師の資材置き場が流されず残っていて、俺は仲間とそこに集まって、メッセーj性の強いロックばかり聴いていた。音楽で気持ちを紛らわすことができたし、ずいぶん癒やされた。

被災地の夜は早いんだ。停電が続いていたし、遊びに行くような場所も当然ない。仲間と話をする時間が必然的に増えていく。そんな中で、いつかフェスみたいなものをやりたいねなんて勝手に盛り上がっていた。先が見えない中で、夢とか、希望と

かを持ちたいんだよね。それが、俺たちにとってはフェスの開催だった。あの当時の大槌では、自分たちは困っています、支援してくださいとか、お涙頂戴みたいなものばかりだった。自分たちだってそういう部分はあったと思う。でも、もっとうだけじゃ駄目なんだと。俺たちは自分たちで立ち上がることができる。全国の人に元気にやっているぞと、そして、支援への感謝の気持ちを伝えたいというのが「おおつちありがとうロックフェスティバル」の原点。

なんとか開催にこぎつけた第1回。いっぱいの方が来てくれて感動したよね。このフェスの大きなテーマは、

大槌の人たちが感謝を伝えるにはどうすればいいのかということ。ありがとうの気持ちを伝えるための花火を上げることを考えた。そして、そのお金は大槌町民の募金で賄おうと思ったんです。被災地の人たちからお金を集めるということも非常識と言われた。ただ俺たちが望んだのは、大槌の人たちに行動してほしいということ。もっとうだけじゃなく、自分たちも出しましょうと。その大人たちの背中を子どもたちが見ている。その子どもたちが未来の大槌を支えていくんです。

大槌保育園の子どもの太鼓と大槌高校の吹奏楽部が、この日のために一生懸命練習して、フェスのステージに立つてくれている。おじいちゃんたちがお酒を飲んだり、その周りで子どもたちがはしゃいでいる。ロックもあるけど、民謡もあって、フラダンスもあって、子どもたちの合唱もある。もちろん東京から来るアーティストのステージもある。そういういろいろな人たちが集まる、間口の広



初開催のころを懐かしみながら語る古館さん

いものにしていきたい。

大槌は、人は少なくなってきたけど、情熱は少なくなっていない。この町の未来を明るくしていきたいよね。そういう人間がいれば、この町は大丈夫だと思う。もともと郷土愛の強い町だし、あの震災をきっかけに大槌を思う気持ちはさらに強くなった。これからも新しいことをやっけていきたいし、面白いことをしていきたい。真剣にぶざけていきますよ。

いちページどう
一頁堂書店

店主はサラリーマンから転身した木村薫さん。震災後の2011(平成23)年12月22日に開業。
 地元で根ざした書店にふさわしく、店頭の一歩目立つ場所には地域の本が並べられている。
 店名には、新しい道を歩み出した店主自身の「一頁」、そして、復興に向かう大槌町の「一頁」という意味が込められている。

Interview | 一頁堂書店 店主 木村 薫さん



「お客さんが求めるものに応えていきたい」と話す店主の木村さん

自分が売りたいものよりも お客さんが欲しいもの 地元で密着したお店でありたい

震災前は化学品のメーカーで働いていました。その会社は小鍮川の河口の堤防沿いにあり、事務所の前にはアスファルトの大きな駐車場があったんです。あの日、地震の揺れが収まった後、社員は駐車場に出たんですが、地割れがすごくて、水が噴出してた。以前、義母から川から水がなくなっていたら、津波が来るからすぐ逃げろと言われたことを思い出して、近くの川を見に行ったら、水が全くなくなっていた。それでみんなですぐに避難しました。事務所は津波にのまれて跡形もなくなり、目に映る全てがなくなっていた。親会社は大阪を拠点としていて、関西エリアの事務所に異動したらど

うだという話も頂きました。息子は春から県内大学への進学が決まっていたし、先祖のお墓もある。悩みに悩んだ結果、岩手に残ることを決めました。次に何をしようか考えている時に、本屋はどうだっかって声を掛けられたんです。大槌で仕事をしたいという気持ちはもちろんありましたが、ただ素人の自分が、災害に見舞われた町でちゃんと商売として成り立たせることができるのかという思いもありました。ショッピングセンターのシーサイドタウンマストの再開が決まり、まずは説明を聞いてみたらと説明会に誘われたんです。行ってみるとそこには本の卸しのトーンの方も来ていて、な

んだか本屋を始めるムードが出来上がっている。大規模なチェーン店の数は増えているけれど、逆に小さな本屋が新しくできるのは珍しかったです。トーンさんの熱心な応援もあり、本屋をやることを決断しました。本屋を始めて7年になりますが、まだまだ自分は素人だと思っています。だから自分が売りたいものを売るといっても、お客さんが欲しいものを会話の中で探っていく。うちのスタッフも全くの素人から始めた人ばかり。それでも毎日真剣に向き合いながら、本屋という仕事を学び続けています。こういう企画をやってみたいとかアイデアも積極的に出してくれそうです。お店の中に「大槌学園の棚」というコーナーを設けることもありそうです。高校受験の面接で、どんな本を読んだか聞かれるそうなんです。どんな本を読んだらいいかと中学生に質問された先生が、自分が良いと思った本を冊子で紹介すること考えたそうなんです。それをうちの店で実際の本を並べてやってみ



大切な意味を込めた店名、「一頁堂書店」の看板

たんです。この「大槌学園の棚」は、毎回趣向を変えながら継続しています。他にも大槌でやるイベントにちなんだ本をそろえてみたり、地元で密着したいという気持ちは強い。正直、毎日のことで手いっぱいですが、将来的には本屋であると同時に、待ち合わせの場所を一頁堂にしようとか、とりあえず一頁堂に行ってみようとか、生活の一部のように人が集まる場所にしていきたいです。

大槌陣屋

大槌の伝統・文化を知り、大槌の魅力を再発見する活動をしている。
地区を越え、老若男女問わず町民が活動に参加する大槌陣屋は
昔ながらの子どもの遊びを楽しむイベントや大槌に詳しい町民の話を聞く会合、自然と触れ合う活動を行う。

Interview | 大槌陣屋 会長 佐藤 加奈絵さん



子どもたちが「陣屋」という秘密基地を作って遊んでいた昔の文化に倣い、力を合わせて陣屋を作る「陣屋まつり」(2019年4月撮影)。
前列左から3人目が佐藤さん、4人目が藤原テエ子さん

大槌の良さを再発見 震災後につながっていった 新しい「町民の輪」

「こんなにもいいものがたくさんあるのに、どうして生かさないんだ」と、町外から来た人に言われたことがあるんです。私たちは生まれてからずっとここにいるから、大槌の良さには気付いていないんですね。

人の話や体験を通して、大槌の良いところを知ることができる。それが「大槌陣屋」です。昔ながらの子どもの遊びをみんなで楽しむ「陣屋まつり」をはじめ、伝統芸能の「鹿子踊り」で使われるドロノキの植樹の知恵を学んだり、マタギの人の体験談を聞いたりして、大槌の歴史や文化に触れるんです。ちなみに、私たちは誰かの話を聞く集まりを、「きつ

かけ話」と呼んでいます。みんなが集まる「きつかけ」になるからね。

震災前って、小さな集まりの活動は盛んだったけど、町全体が集まると何かをするとなるとお祭りの他になかった。陣屋に各地域から人が集まると、輪が広がっていったっていうのはあると思います。

例えば、小槌地区にお料理上手な藤原テエ子さんっていう方がいて、陣屋で郷土料理を楽しむ会を開いた時にテエ子さんのお宅にお邪魔して、昔のようにお膳でテエ子さんの手料理をいただきました。その時にテエ子さんが私の同級生のお母さんだっということに気付いたんです。

改めてつながるのを感じましたね。孤立していた個々のものが、震災後につながっていくような感覚です。

ボランティアの皆さんに支えられていた陣屋も、住民だけでやっていくことになりました。最初は、いっぱいいいですよ。「やめたい」って思ったこともあります。そんなとき、テエ子さんが「陣屋が好きで、楽しみなんだ」という話をしてくれたんです。「ゆっくりでいいよ、やれるときにやろう」と。それから、「陣屋は強制じゃないし、できるときにやろう！」と思えるようになりましたね。

震災から3年くらいは、なんとかがんばらなきゃっていう思いでやってこれた。でも、思うように復興しなかったり、住む場所が定まらなかったりした6年目くらいが一番つらかったです。最初はとにかく「がんばってれば、どうにかなる」という希望があったんですけど、困難にぶつかり過ぎて、落胆の方が強くなるというか。



安渡地区で美容室を経営する佐藤さん

無理がたたつてるんですね。がんばり過ぎていたんだと思います。それでも、心のどこかには、「運よく生き残ったんだから、亡くなった方のためにもがんばらなきゃ」という気持ちもある。山あり、谷ありですよ。日々葛藤しながら、皆さんに支えられ前を向いて歩くことができます。

はまぎく若だんな会

震災を機に「愛する古里のために逆境に立ち向かう」という志のもと立ち上がった、町内の若手経営者の集い。
2012(平成24)年から、砂浜で砂像作りを楽しむ「砂の芸術祭」の開催や、「海と森の映画祭」への協力、
防犯パトロール「地域見守り隊」など、自分たちの住む町をより良くしようとさまざまな活動を行ってきた。

Interview | はまぎく若だんな会 代表 ^{はが ひかる} 芳賀 光さん



吉里吉里海岸に勢ぞろいしたはまぎく若だんな会のメンバー

自分の町のことを こんなに真剣に考えたのは 初めてだった

大槌の商売人たちは震災で店も商品も失って、借金抱えて、不安ばかりだった。これからどうすればいいのか途方に暮れた。でも、なんとかしなきゃならないから、若い経営者で集まって話し合った。自分たちがどうすれば生きていけるかを考えていたはずなのに、何度も話し合ううちに、「大槌のために、子どもたちのために、自分たちはいったい何ができるんだろう」と考えるようになった。8社の経営者たちが集まって、真剣に、必死になって「大槌のこれから」を話し合っていた。これが、俺たちの活動の始まりだった。

「だんな」だろ」って言われて。そこに大槌を代表する花「はまぎく」の名も付けて。はまぎくの花言葉って「逆境に立ち向かう」だから。発足の翌年には1回目の「砂の芸術祭」を吉里吉里海岸で開催した。震災後に子どもたちが感じていた、海は怖いもの、近づいちゃいけないものっていう気持ちを少しでも払拭したかった。翌年には「大槌お宝マップ」を作って、町内の小中学校に配布した。震災で失われた宝も、津波に流されず残った宝も、どうにかして子どもたちに伝えたかったから。大槌にすむ生き物、郷土料理、海の遊びとかを盛り込んで、子どもたちが自分たちの住む大槌の魅力に気付いてもらえたらって願いを込めて。

このマップが町の教育委員会の目に留まって、「小中一貫教育校の『ふるさと科』の教材にぴったりだから、授業をしてくれませんか」って声を掛けてもらって。それからふるさと科の授業に携わるようになった。子どもたちと接する中で、防犯パトロールもあつた方がいいと考えて警察に相談した。まだ街灯がない時期だったし、「地域見守り隊」として、自分たちの仕事の車にパトロールの青い回転灯を付けて、メンバーが夕方道に立つて子どもの帰りを見守った。子どもたちは「若だんなの車だ！」って声を掛けてくれたし、安心してたみたい。ほかにもいろんな団体を受け入れたり、校舎ができる前の大槌学園に、木彫りの特製看板を寄贈したりもした。とにかく地元が盛り上がりたければいいと思ってやっていた。

震災から8年。若だんな会の活動は続いているけれど、今は以前ほどみんなが集まる機会は多くない。でも、何かやりたいと思ったときに気軽に相談できて、一緒にやれる仲間。緩やかにつながっている。今の大槌は、みんなすごく先を急いでいる気がする。何百年とかけてできた町を、10年やそこらで元通りにつけていうのは無理がある。元に戻さなくてもいい。新しい考え方も取り入れながら、でも、大槌の人が持っている優しさや思いやりは決して忘れず、常に言葉を掛け合いながら、これからもここで生きていく。



海に親しみながら町に活気を取り戻そうと開催された「砂の芸術祭」

おらが大槌復興食堂

2011(平成23)年11月11日にオープンし、13(同25)年に惜しまれつつ閉店するまで、多くの人に愛された「おらが大槌復興食堂」。ボランティアや観光で訪れるお客さんが、地元の人と交流を深める場となった。当時、岩間さんは食堂の「みんなの母ちゃん」として親しまれ、阿部さんは食堂の立ち上げに携わった。

一般社団法人 おらが大槌夢広場 理事

岩間 敬子 さん

Interview

シニアカフェ (一般社団法人 おらが大槌夢広場 元代表理事)

阿部 敬一 さん



復興食堂の取り組みが評価され、2012年度地域づくり総務大臣表彰の団体賞を受賞した

支えてくれたたくさんの人に

感謝を込めて

大槌の元気な姿を発信したい

阿部さん 震災後はいろんな場所で炊き出しがあったんですよ。その時に支援で大槌に来ていた人とならぶ、「大槌が盛り上がることをやるう」と話していました。何度も話して、今の大槌には何か必要かを考えたときに、「食べる場所」だなんて。
岩間さん ボランティアや復興事業で外から来る人はゆっくり座って温かいものを食べられる場所がなかった。大槌のおいしい料理を食べてもらいたかったので、復興食堂を立ち上げた。
阿部さん メンバーがたまたま元土木関係者や営業マン、水産関係者とかで、食堂の立ち上げに必要な専門家が集まっていた。食堂完成まで2週間しかない状況だったけど、

なんとか完成させた。あのメンバーじゃなきゃできなかったよ。
岩間さん 「できるわけがない」と担当の行政の人に反対されたよね。私も旦那に「食堂をやるから手伝ってくれ」って言われて、無茶だと思っただし毎日のようにけんかした。でもみんながんばってるのを見ていたし、懇願されたもんだから折れました。
阿部さん そうでした。11月11日に食堂をオープンして、今度は運営でバタバタ。そんな中でお客さんに来てよかつたと思ってももらえるように必死でやっていた。あの時の食堂は、来れば誰かにつながる場所だったんじゃないかな。
岩間さん 外から来た人たちと地元の人との意見交換の場だった。た

くさん人が来て、いろんな話をしたよ。でも、2年たつてまちづくりも進んできて、お店がある場所も盛り土をしなきゃいけなくなつて。移転するために貸してくれる土地は見つけど、被災事業者ではないので補助金もなく、お金のめどがなかなか付かなかった。結局お店を閉めなきゃいけなくなった。
阿部さん でも縁があつて、震災後から物資を届けてくれているボランティア団体「飛行船」が、意志を受け継ぐ形で運営してくれることになった。今は栃木県で復興食堂が続いています。
岩間さん 今月1回、野菜、果物など届けに来ながら、地元商店さんから食材を仕入れ、震災を忘れないために変わっていく復興の状況を伝える場として食堂を運営してくれて。大切なつながりだね。
阿部さん 震災後に出会った人たちとは、ずっとつながっていくと思う。
岩間さん 私もいろんな人に本当に支えられたと思う。だからた



二人は今も町内のイベントなどで顔を合わせている

くさんの方に感謝の思いがあつて、できることは少しでも協力したいと思う。それに、今も大槌を気にかけてくれる人たちに「ここまで元気になりました」って発信していかなきゃ。そうやっていくことが復興だと思う。
阿部さん 震災当時中高生だった子たちが社会に出た今、経験を生かして新しい風を起こすリーダーが生まれるとわくわくしています。彼らを応援していくことが、僕たちの役目だと思います。

Episode file

～広報おおつち～

大槌町の元気あふれる姿を たくさんの人に伝えたい



現・総務課総務広聴班 主事
はな い し ひ と し
花石 均

現・環境整備課管理班 主任
お が わ ら ゆ う き
小笠原 佑樹

大槌町に関わりのある人は、一度は読んだことがあるであろう広報誌「広報おおつち」。震災直後にその制作に携わった役場職員の一二人に、広報づくりを通して感じたことを聞いた。

― 震災直後、広報は町の皆さんに情報を伝える重要な役割を果たしましたね。

小笠原 震災直後に情報が錯綜していた中で、3月28日から「大槌町災害対策本部情報おおつち」を発行しました。最初は配給や炊き出し、電気ガス水道の復旧などの生活情報を知らせました。その後、機材などの制作環境が整ってきたこともあり、大槌まつりの写真を表紙にした通常版の「広報おおつち」を10月5日に発行しました。「いつも通り」が戻ってくるのが安心につながると感じていたので、元気に活動している姿をたくさんの人に見せたいという思いでした。

― 広報を担当する中で印象に残っている出来事はありますか。

花石 震災後に成人式の記事を書いた時ですかね。大槌町の成人式では同級生の遺影を持った成人を毎年見かけます。それこそ、みんな笑顔で、姿はなくても一緒に成人したという仲間意識を強く感じました。そういった思いを胸に記事を書いたことが印象に残っています。

小笠原 震災の日は町外向けの広報の集荷日で、広報は被災した郵便局で水をかぶりましたが配達されたんです。その後、郵送料金の払込用紙が送られてきて、余白に大槌町への応援メッセージが書かれたものもありました。震災直前の広報でしたが大槌町の情報が少ない時だったので、非常に喜んでいただいたことを覚えています。

― 広報を作る上で大切にしていることはなんですか。

小笠原 町民の皆さんに情報をお伝えすることが第一ですが、大槌町出身者や大槌町への支援者の声もしっかりと紹介するようにしています。地元から離れている人ほど、大槌町の状況が見えず非常に心配していたことを痛感し

ていたからです。離れていても地元を心配し応援し愛する気持ちは変わらないうことや、仲間がたくさんいることを伝えていきたいです。震災をきっかけに生まれた大槌町を思う気持ちや絆を大切にして、これからも大槌町の情報をたくさん届けていきたいです。

― 花石さんは現在お仕事をやる上で大切にしていることはありますか。

花石 私たち役場職員は、さまざまな状況で困っている人たちが通常の生活を取り戻せるまで、あらゆる方法で助けるお手伝いをするのが使命だと思っています。誰も経験したことのない震災だったので、挫折や遠回りをしながら復興しています。時間がかかることもありますが、自分たちで立ち上がり進んでいくことが必要であり、それが生きていく力になることを実感しています。まずは私自身が何事にも挑戦し、子どもたちや若い世代を勇気づけることができたらしいです。

(取材/2018年4月)